

## Ⅱ 普及指導上の参考資料

岩手県園芸試験場

### 1 わい性台使用苗木繁殖上の注意

#### 1) 背景と特徴

最近のりんご栽培で、わい化りんご園面積の増加は全国的に著しいものがある。

しかし、わい性台木から根がでた良質な苗木の供給は必ずしも十分でなく、わい化栽培推進上の大きな障害となっている。またわい化栽培を補助事業として実施する場合、よくわい台の根がでないまま、中間台的苗木として栽植される例も多い。これはわい化りんごの推進にあたって、将来大きな禍根となるおそれもあるので、わい性苗木の繁殖には次の点に注意しなければならない。

#### 2) 技術の内容

##### (1) 繁殖上の注意

###### ① 苗木圃

苗木圃は、地力があり排水もよく、また水管理に便利な場所を選定する。推肥(10a当たり2t以上)の施用や土壌改良を行っておく。

###### ② 台木の繁殖

###### ア 取木法

1年目春=発根台木を植付けて、1年間肥培し、株を大きくする。植付け間隔は畦巾2m、株間40cm程度が管理上よい。植付けは、その後の盛土を容易にするため、地表下15~20cmの深さの溝を掘り植える。

2年目春=地上部を5~10cmに切りつめ、新梢を出させる。

2年目夏=伸びた新梢中貧弱なものは整理し、新梢の伸びにあわせて、新梢停止期までに2~3回にわけて盛土する。盛土の程度は新梢の半分をこえない程度とし、最終的には20~30cmとなるようにする。

3年目春=融雪後、発芽期までに発根台木を掘り取り、移植する。母株は短く切り返えし、盛土をはねて、新梢の発芽をうながす。

4年目以降=このくり返しにより毎年発根台木が得られる。

###### イ 接木盛土法(実生台又は丸葉台にわい性台木を接ぐ方法)

1年目春=実生又は丸葉台(以下「実生台など」という)にわい性台木を接ぐ。間隔は畦巾2m、株間40cm程度にする。取木法の1年目春と同様の取扱いをするが、この

場合、新梢は1本仕立てとする。

2年目春＝掘り上げて、台木根の十分でているものは、下部の実生台或いは、丸葉台を接いだ部分の上部で確実に切りとる。台木根発生が貧弱なもの又は出ていないものは再び肥培し直す。

## (2) わい性台りんご苗のつくり方

### ① 根の十分出ている台木を用いる場合

1年目春＝母株からとり木した台木を苗木圃場に定植（ $2 \times 0.3 \text{ m}$ ）し、丈夫な台木養成する。

2年目春＝所定の高さ（台木長 $45 \sim 50 \text{ cm}$ ）に品種を接木する。

3年目春＝フェザーの良く発生した健苗は本圃に定植できるがそうでないものはその場で $85 \text{ cm} \sim 1 \text{ m}$ に切りつめる。

3年目秋～4年目春＝苗木は掘り取り、フェザー（初期結実候補となる小枝）は主幹に対して強すぎるもの以外は残し、芯は、定植時に一度切りかえして定植する。

### ② 根の十分でない台木を用いる場合

・根のでないわい性台木の苗木を使用するときは、わい性台と実生台の接目の上部にビニールやポリテープを巻いて苗木圃で養成する。

・これはわい性台からの発根を促がすためで、そのまま定植しても、実生台などは生きていて、バエの発生をみたり、本来のわい化を示さない。

・このような苗木は、もう一度、苗木圃で台木根の発生を促す（畦巾 $2 \text{ m}$ 、株間 $30 \text{ cm}$ 、植付深さ $20 \text{ cm}$ ）

・わい性台からの発根のよいものは、実生台などを確実に切り落として定植する。

### ③ 根の十分でない苗木を定植した場合

・わい性台と、実生台などの接目にビニールや鉄線（16番線、4回巻ぐらい）を巻いて定植しても、確実に、実生台などが枯死するとは限らないので、原則として掘り起して確認する。しかし4～5年生以上で、樹の大きいものは困難なので、バエの発生をみたら逐次、できるだけ地下の深い部分で切除する。

## 3) 普及上の留意点

(1) 冬期乾燥する地帯では秋植えはさけ春植えとする。

(2) わい性台木は乾燥に弱いので、植付時は灌水や根元に敷わらを行う。

(3) 苗木の発芽を促すため、芽傷をつける場合は樹勢のよいものだけにし、弱いものは行わない。弱い樹で行うと、枝枯病の発生をまねき枯死することがある。

- (4) 立派なわい性台苗木は、フェーザの多く出たものである。またフェーザは水平に出すようにすると、花芽の着きもよく、早期結実に結びつく、そのためには、3年ころまで誘引が大切である。

## 2 りんごわい性台木M9について

本県でのわい性りんご台木については、わい性の程度や土壌の適用範囲などから、わい性台ではM26、半わい性台ではM7、MM106をすすめているが、とくに土壌や気象の状態から一部にM9の使用もみられる。この台木はウイルスの保毒台木であり、この台木の扱いは次の点に注意する。

- 1) M9=これは数種のウイルスを保毒しており、この台木を使用した苗木は、品種によって生育を損なったり、欠株を生じることがあるので、予備苗を多く準備しておくことが望ましい。この台木の繁殖に際しては、台木根の発生が悪く、実生台などを用いる場合でも、培土や水管理など、発根し易い土壌環境をつくってやることである。つがる/M9は衰弱、枯死する例(長野、岩手)が起っている。
- 2) M9A=これは数種のウイルスに対し、無毒株である台木のことである。またこの繁殖は取木によるのがよい。

現在、種苗業者が育成した苗木で、M9Aと呼ばれているものに、次の2種がある。

- ① 熱処理をしてCLSV無毒として実生台や、丸葉台に接いでいるもの。
- ② M9Aと称する台を実生台や、丸葉台に接いだもの。

これらは本来のM9Aと異なり、CLSV以外のウイルスは保毒しているおそれがある。したがってこれらの台木は、いずれもM9台と同様、生育、結実、収量など本来のM9Aと異なるようであり、購入に注意するとともに、繁殖にあたっては、発根しがたいので、土壌環境をよくすることが大切である。

## 3 52年度りんご病害虫防除暦に採用した農薬の特性と使用法

最近の果樹農薬は病害に対する抵抗性の問題や、安全使用基準等の関係から大巾に規制されつつある。また数種の病害に対して効果の大きい農薬は少くなり、ややもすれば特効薬的存在のものが多い。従来のもに比較してその効果が高く、新しく普及に移した農薬は、つぎの3種である。

### (1) ジマンダイセン水和剤(マンゼブ剤)

- ① 特性=赤星病や黒星病、黒点病などに対して高い防除効果を示す。残効期間は7-10月ぐらいで、薬害もなく、予防効果が高い。
- ② 使用法=赤星病を対照に600倍の濃度で開花直前に1回散布するが、この時期には黒